

舞踊学フォーラム

第1回

舞踊学にとってアーカイブスとは何か？

貫（司会） それでは、そろそろ始めたいと思います。第1回となります舞踊学フォーラムでございますけれども、私はフォーラム全体の進行役を務めさせていただきます貫と申します。よろしくお願いたします。

今回は、舞踊学会の会員だけではなくて、一般の方々にも参加していただけるという、いわゆる

オープンな形でのフォーラムの第1回ということになります。今年からそういうことになったわけですけれども、まずその企画の趣旨とか目的などにつきまして、舞踊学会の会長であります古井戸秀夫より、初めにご挨拶をさせていただきますと思います。

古井戸秀夫会長 古井戸でございます。今日はようこそ、舞踊学会の第1回フォーラムにいらっしました。私も舞踊学会は1975年にスタートしております。そしてその翌年の76年に第1回の大会を開きまして、今年の12月4日、5日、日本大学の芸術学部で第62回の大会を開くことになっております。また、大会だけではなくて、もう少し機動力を発揮した例会をやろうという機運が平成になって生まれてまいりまして、それも今日午前中に15回を無事に迎えることができました。

そういう歴史を歩いてきたわけですけれども、どちらかというと学会の内向きの活動が多かったので、そろそろ学会以外の、多くの舞踊を愛好してくださる方々や研究してくださる方々、あるいは踊っていらっしゃる皆さんと一緒に何か舞踊について考える場所をつくりたいと思ったのが、このフォーラムでございます。どういう形になるか、1回目ですので実験的なところもあろうかと思いますが、私どもとしては、ゆっくりとこのフォーラムを皆さんと一緒につくっていきたくて思っておりますので、どうぞ今日のごゆっくりとお過ごしください。

ところで、私どもがイメージしましたのは、1991年になるかと思えますけれども、この芸術劇場で大会をいたしました。その時に、テーマは「スペイン舞踊の足の表現」だったのですけれども、ダンサーの小島章司さんと、それから亡くなりました評論家で研究者の市川雅さんが2人で対談をなさいまして、対談の途中になると小島さんがステップを踏み始めて、それを見ると市川さんが反応されてという、なにか舞踊学本来の姿を見たように私は記憶しております。できればそれがまたもう1度やりたいというのが、この会場を選んだいちばんの理由でございます。今日も、そういう趣旨をご理解いただきまして、舞踊家の皆さん、あるいは演出家の先生、いろいろな方に参加をしていただいております。

テーマはアーカイブスというものを取り上げました。アーカイブといいますが、普通は文献資料、文書です。しかし我々舞踊学にとりましては、文

献や資料も大事ですけれども、それ以上に、たとえば舞踊譜ですとか楽譜ですとか、あるいは衣裳のデザイン画ですとか、あるいは衣裳そのものすとか、あるいはオブジェですとか、様々なものに広がっていきますし、最近では映像資料は舞踊の研究には欠くことのできないものになっています。たぶん、いろいろな芸術ジャンルがありますが、舞踊が最もアーカイブスが豊かで、そして研究も最先端にあるのではないかと考えています。

今日はその中でも、日本の古典芸能ですとか、日本におけるバレエの研究ですとか、これはたぶん世界では最先端のアーカイブスを形成していると思いますので、お2人の先生に来ていただきまして、その現状をご講演でお話しいただこうと思っております。そして、古典のアーカイブスを踏まえて、では現代舞踊家は自分たちの現代舞踊のアーカイブスをどういうふうに受け止めるのか、そして研究者、批評家は、その受け止め方にどのような反応をするのか、現代舞踊のまさに生きているアーカイブスを第2部では取り上げようと考えています。

第3番目が、我々のいちばん大きなテーマになりますけれども、ちょうどその中間ですね、古典として安定している部分と現代のまさに生まれつつあるものとの間に、近代舞踊というものがございます。これももう、石井漠が最初に舞踊詩を踊って、100年近い時間が流れました。その中で様々な先達がアーカイブの仕事に関わってまいりました。40年、50年という長い歴史があります。ここを、100年というちょうどいい機会を目前にして振り返って、そしていま我々は近代舞踊のアーカイブスにとって、どのようなことをすべきなのか、あるいはどんな可能性がそこにあるのだろうか、そんなことを今日は1日考えていきたくて思っております。

休憩を含んで3時間と少し長めの時間でございますが、話題は楽しい話題でございますので、どうぞゆっくりと最後までお楽しみいただきたいと思います。（拍手）